

特集 /

美術館の教育普及活動

美術館の教育普及活動には、トークイベントや対話型鑑賞などおなじみのものも多いが、
 そこでしか体験できないユニークな活動を行っている館も少なくない。
 今回は、全国の美術館の教育普及活動の中から、
 中高生を対象とした特色ある活動を取材した。



「自分にとっての美術」を発見!

大分県立美術館 (大分県) OPAM美術部

撮影:大橋弘嗣

大分県立美術館では、2021年度から中高生を対象とした新たな教育普及事業として「OPAM美術部」とよばれる活動をスタートさせた。年間を通してテーマを設定し、創作を中心とした活動を月1~2回コンスタントに行うというものだ。

キーワードは「出会い」

2022年度のテーマは「素材と技術」。子どもたちは、植物、金属、土、石、繊維などのさまざまな素材や、それらを活用するための技術に触れていく。そして年度末には、特別プロ

ラム「アーティストとの出会い」に参加。彫刻や特殊照明などの専門家が、素材とどのように対話しているのかを知り、発想を広げるきっかけとする。

プログラムの趣旨について、OPAM美術部発起人の榎本寿紀さん(教育普及室 室長)は、こう語る。「出会いのきっかけを与えるのが大人の役割だと思っています。子どもたちが普段出会うことのない人に、ぜひ会ってほしいという思いから企画しました」。

自分の表現を自由に

取材に訪れた日、子どもたちは、「石膏取り」(*)とよばれる方法で石膏の彫刻を制作していた。しかし、全員が同じことに取り組んでいるわけではない。納得がいくまで粘土の原型をつくり込んでいたら、石膏取りをするより粘土を使って塑造で作品を完成させたいと考えるようになった部員もいれば、石膏の塊から複雑な形を掘り出していく彫造に変更した部員もいる。一方で、早々に石

膏取りを終え、木材や金属、石材など好みの素材を使った作品をいくつも生み出している部員もいる。何ともゆるやかで、自由な活動ぶりについて、榎本さんはこう考える。「大切にしているのは、制作のプロセスや期待感。今回は石膏取りをメインに据えています。そこに至るまでに、土の塊を砕くところから粘土づくりをはじめると、素材とじっくり向き合うような活動も行っています。その体験を、自分なりの表現につなげていってほしい」。

OPAM美術部の目指すもの

なぜ、美術館にこのような自由な創作の場をつくらうと考えたのか尋ねると、「多感な時期特有の感性をもつ中高生に、美術館という場で新しい出会いがあったら、お互いのもつパワーがもっと活性化するんじゃないかと思ったんです。『自分にとっての美術』とは何か、みたいなものが見つけられたら、それがいちばん」と、榎本さんは屈託なく笑った。

自分にとって何が魅力で、何が楽しくて、何に心を動かされて、次は何をしたいと思うのか。そんな大切なことが見つかるまで、手を動かしながらじっくり考えられる贅沢な場が、OPAM美術部には用意されていた。



大分県立美術館
 大分市寿町2番1号 <https://www.opam.jp/>



右上/新たに木材を使った作品に挑戦する。細かい下絵を再現するにはどうするか、相談中。
 右下/石を用いた作品。
 左上// OPAM美術部活動中!
 左下/各々のペースで石膏を使った彫刻作品を制作する。

OPAM美術部部員の声

Mさん OPAM美術部には、作品づくりや、作業に没頭することが好きだから参加している。

Rさん 学校では、数時間やったらすぐに次の作品へ移っていくけど、OPAM美術部はじっくり時間をかけられるのがいい。

Tさん 次は油絵を描いてみたい。みんながやっているのを見て、木材の彫刻もおもしろそうだった。

Yさん いろいろな素材を使って作品をつくってみたことで、木が好きだと気づいた。磨くと滑らかな手触りになったり、切り出して好きな形をつくりたいところが好き。

OPAMとは、Oita Prefectural Art Museumの略で、大分県立美術館の愛称でもある。

*石膏取り……粘土で原型をつくり、石膏で型取りする方法。



ワークショップで、 作品の世界を体感！

十和田市現代美術館 (青森県) 撮影:長岡博史



水の記憶(塩田千春)
撮影:小山田邦哉 ©2021 JASPAR, Tokyo and Shiota Chiharu

アーツ×げんび ワークショップシリーズ vol.13 中高生のための休日ミュージアム

2019年から始まった「アーツ×げんびワークショップシリーズ」は、「げんび」(十和田市現代美術館)でしか体験できない、独創的な教育普及プログラムだ。

ワークショップは こうして生まれた

十和田市現代美術館といえば、草間彌生、奈良美智、ロン・ミュエクなど世界で活躍するアーティストのコミッションワーク(*)による常設展で知られる。そのユニークな展示は多くの話題を集め、開館から15年で来館者数200万人を超える。

そんな中、なぜわざわざ手間のかかるワークショップを開催するのか。同館のエducーター青山真樹さん

はその理由を語る。「みなさんに、作品をもっと“味わって”もらいたい。そのために何ができるだろうと考えていました。そこで考案したのが、常設作品の鑑賞と体験を組み合わせた、体感型のワークショップなんです」。地域で子ども向けのアート教室を主宰している佐貫巧先生(アーツ代表/八戸学院大学短期大学部 准教授)も同じ思いを抱いていた。「地域の子に、げんびの作品にもっと親しんでほしい。何か力になりたいと思っていたので、すぐに意気投合しました」。

多感な中高生のための プログラム

日曜日の昼下がり、高さ9メートル

ルのガラスに面した開放的なスペースの一画に、市内の中高生5名がやってきた。青山さんとアーツのスタッフたちが、子どもたちを和やかな雰囲気を出迎える。

今回、子どもたちが鑑賞する作品は、「水の記憶(上写真)(塩田千春)」。古びた木船から無数の「赤い糸」が張り巡らされたこの作品は、人や物との複雑な関係性を表しているようにも見える。ワークショップでは、「赤い糸」を媒介して、自分たちを取り巻く、さまざまなつながり、しがらみを視覚化して浮かび上がらせ、作品世界を自分の感覚で捉え直すことを試みる。青山さんと佐貫先生が、多感な中高生のために考案したプログラムだ。

ワークショップの流れ

1 作品鑑賞



展示室で「水の記憶」を鑑賞。

2 導入ワーク



自分が着ている服にまつわる「つながり」や「思い出」を模造紙に書き出す。

3 ほっこりタイム



お茶を飲みながら、書き出した「つながり」について語り合う。

4 身体ワーク



ダンサーの磯島未来さんのアドバイスのもと、赤い糸を自分の身体に絡ませてみる。



ワークで使用する赤い糸は、「水の記憶」で使われているのと同じもの。

腕が痛そうだね。



支えられているから意外と大丈夫。

Aさんが動く、私も動かないといけないね。

初めは一人で、次にペアになり、最後はみんなで行ないます。

5



複雑に絡み合った赤い糸から抜け出す。



6

作品鑑賞

もう一度展示室へ。

げんびを 中高生の居場所に

今回で13回目となるワークショップシリーズだが、実は、中高生向けはこの日が初めてだという。しかし青山さんは、以前から「現代アートと中高生は親和性が高い」と考えていたようだ。「作品を通して、同じ世界に向けられた、自分とは異なるまなざしに気づかされる。そういう意味で、作品鑑賞って他者と出会うことなのかもしれません。自他の間で揺れ動く年ごろだからこそ感じるものがあるはず——」。

佐貫先生にはまた別の願いがあっ

た。「人間関係に敏感な中高生を、思いきり解き放ってあげたいと思っていた。だから今日は、赤い糸から解放される場をつくったんです」。

スタッフそれぞれの思いが詰まったプログラムだが、常に大切にしているのは「答えを出さないこと」だという。「作品に決まったひとつの

解はない。だからこそ、すぐに答えを出さずに、立ち止まってぼんやり眺めたり、ぐるぐる考えたり。そんなふうにご過ごすことのできる場所でもありたいんです」。青山さんは真摯なまなざしで語る。十和田市現代美術館には、それを受け入れる懐の深さがあるのだろう。



現代芸術教室 アーツ
青森県八戸市を拠点としたアート教室。子どもが本来持っている発想力を引き出し、何かを表現したりつくり出した過程を大切にしている。

十和田市現代美術館
青森県十和田市西二番町10-9
https://towadaartcenter.com/

*設計段階からアーティストが関わる委託制作。

表現

ワークショップの詳細は、各館のウェブサイトなどご確認ください。

東京都現代美術館 (東京都)



東京都現代美術館 東京都江東区三好4-1-1
<https://www.mot-art-museum.jp/>

アーティストが行うユニークな出前授業 「アーティストの1日学校訪問」(年6校/2~3学期)

現代美術の普及と新進・若手芸術家への支援、子どもたちの育成に力を入れる東京都現代美術館では、現在活躍中の現代美術のアーティストが、都内の学校を訪問し授業を行う「アーティストの1日学校訪問」を実施している。

2021年度は、先進的な木版画作品で知られる風間サチコさんが講師となり、小学校4校、高校2校を訪問。「ユーモアを交えながら考えを上手に伝える方法」をテーマに、ふだん生活する中で言いたくても言えないことを、アートを手段にして表現するという授業を行った。アーティストの技巧だけでなく、ユニークな思考なども垣間見えるのが魅力だ。

※「アーティストの1日学校訪問」は、表現と鑑賞の両方の要素を含む取り組みのため、担当アーティストによっては鑑賞中心のプログラムが実施される場合があります。

静岡県立美術館 (静岡県)



静岡県立美術館 静岡市駿河区谷田53-2
<https://spmoe.shizuoka.shizuoka.jp>

1トンの粘土で大きなスケールのものづくりを体験 「ねんど開放日」

世界でも屈指のロダンコレクションを有する静岡県立美術館では、ロダンの作品の原型が粘土で制作されることになって、3歳児から大人までを対象としたワークショップ「ねんど開放日」を開催している。

およそ1トンの粘土を自由に使って遊べる機会とあって、毎回大盛況だ。粘土と触れ合いながら、各グループが個人制作、共同制作など、さまざまなレベルの創作活動を行うことができる。使用される粘土は、陶芸などに使われるに似ている少ない水粘土というもの。大人も子どもも裸足になって体をいっぱい使って制作を行う楽しさに、リピーターも多い。

愛媛県美術館 (愛媛県)



愛媛県美術館 愛媛県松山市堀之内
<https://www.ehime-art.jp/>

多種多様な創作活動を応援する 「アトリエ」「アトリエ教室」(「アトリエ教室」は月4回程度)

「参加創造型美術館」を掲げる愛媛県美術館は、誰でも自由に利用できる「アトリエ」を開放している。制作可能な種目は版画(凸版、凹版、孔版、平版)、染め、織り、フェルト、紡ぎ、木工、絵画と多岐に渡る。

また、創作に関する相談や、機材の使い方についてレクチャーを受けることができる「アトリエ教室」は、興味はあるけれど何から始めていいかわからないといった人にもおすすめです。初めての素材や技法にチャレンジしてみたり、自宅ではなかなか取り組みにくい大型の作品に着手してみたりと、創作の幅を広げるのに役立ちそうだ。

鑑賞

札幌芸術の森野外美術館 (北海道)



札幌芸術の森野外美術館 札幌市南区芸術の森2丁目75番地
<https://artpark.or.jp/shisetsu/yagai-sapporo-art-museum/>

銀世界の中、作品を味わう 「芸森かんじきウォーク」(冬季限定)

起伏に富んだ自然の中に広がる札幌芸術の森野外美術館では、毎年、1月上旬から3月中旬に「芸森かんじきウォーク」を開催している。雪上を歩きやすくするため、古くから雪国で使われてきた民具「かんじき」を履いて、雪中の野外美術館を自由に散策することができるイベントだ。

大自然の中に展示された作品の多くは、作家自身が実際に当地を訪れ、地形や周囲の状況、気候などをもとに「その場所のために」制作した作品だという。季節やその日の天気によって作品の見え方が変わるの、野外美術館の醍醐味。運がよければ、かわいらしい小動物に遭遇することもあるそうだ。

京都市京セラ美術館 (京都府)



京都市京セラ美術館 京都市左京区岡崎円勝寺町124
<https://kyotocity-kyocera.museum/>

美術館スタッフと談話を楽しむ 「ぼよよんタイム」(不定期開催)

京都市京セラ美術館では、2020年のリニューアルを機に教育普及活動を「ラーニング・プログラム」へと改名。「教える」から「学びあい」へ」をキーワードに、さまざまなプログラムを実施している。

中でも特徴的なのは、ラーニングの拠点である談話室に、美術館スタッフが在室する時間を設けた「ぼよよんタイム」だ。対話を楽しみながら、一人一人に合った美術館の過ごし方を一緒に考えることができる時間として、誰にでも開かれている。美術館のおすすめの楽しみ方についてたずねたり、美術に関する素朴な疑問をぶつけたりと、スタッフに積極的に話しかけてみよう。

大原美術館 (岡山県)



大原美術館 岡山県倉敷市中央1-1-15
<https://www.ohara.or.jp/>

美術館を貸し切り 「学生団体向けイブニングツアー」(閉館後)

日本で最初の西洋美術中心の私立美術館として知られる大原美術館は、学生団体向けのイブニングツアーを開催している。

これは、閉館後の1時間限定の特別な鑑賞ツアーで、30名以上の学生団体として事前に申し込みをすることで実施される。プログラムの内容は、同館について10分程度レクチャーを受けた後、館内を自由に鑑賞できるというシンプルなものだが、自分たちだけの貸し切りで作品が鑑賞できるのは、貴重な体験になりそうだ。閉館後の美術館に入れるという特別感もうれしい。平日、休日問わず大変なにぎわいを見せる大原美術館のいつもと違う姿を、生徒と先生だけで贅沢に味わおう。